

その3

(2015年10月10日～21日)

今回は、前回で巡り損ねた別格第1番「大山寺」^{たいさんじ}に寄るために上板町神宅^{かんやけ}に立ち寄り、翌日神宅からバスで徳島駅経由で今回のスタート地点である第20番札所「鶴林寺」の登山口である勝浦町生名に向い、そこから剣山地を越えて徳島県日和佐海岸に至り、阿南室戸海岸沿いに室戸岬を越えて高知市に入り、第35番札所・土佐市「清瀧寺」まで歩いた。勝浦町では同じく別格第3番「慈眼寺」に寄った。

【10月10日、晴れ】 自宅～JR高徳線「板野駅」(バス) 上板町「神宅」

神宅着が午後遅い時間であったので、神宅からタクシーで別格1番「大山寺」に参った。大山寺は、寺伝によれば千四百五十余年前に開かれた阿波仏法最初の寺院で、江戸時代に平安時代末期の大治元年の銘が刻まれている銅経筒が出土した由緒ある寺だそうだが、行ってみると山門も壊れそうな廃寺と紛う気配であった。しかし何人かの遍路も参っていて、ちゃんと納経朱印も頂けた。(神宅街道にある大山寺への道標の標石⇒)



(荒れ果てた大山寺の山門と仁王門)

大山寺は阿讃山脈東部の大山^{おおやま}の中腹にあり、この辺りにはかつては平家落人の大きな集落があったそうで如何にも山奥の隠れ里の感があるが、今は牛を飼っている農家が4軒しかない幽霊部落となっていた。

この寺がある大山^{おおやま}の山頂(691m)は讃岐と阿波の國境になっていて、「阿長讃淡紀泉河摂播備」十州を望見できる景勝地で徳島百景のひとつとなっているらしいが、残念ながら頂上まで登ってみる時間が無かった。「六国峠」や「関八州見晴台」などという国見場所はあるが、十州というのは非常に珍しいのではなかろうか？或いはチョット眉唾か？

帰途、トボトボと歩いて下山していたら、山門前に駐車していた神戸ナンバーの車の遍路氏が拾ってくれた。これも有り難いお接待の一種であるので、遠慮なくご好意に甘えることにした。一般にマイカー遍路氏が歩き遍路を拾ってくれるケースは滅多にないが、ロートル歩き遍路としてはこちらからヒッチハイクをお願いしたいくらいだ。神宅の町で下して貰ったが、その時態々車のトランクを開けてカバンの中からエネルギーゼリーを差し出されて、“野宿遍路を頑張って下さい”とのことだった。

さて、その夜は、前回と同じ神宅の遍路小屋の四阿に再び泊めて頂いた。小屋の世話をされている近くの畳屋さんに前回もお世話になったので、今回は小田原の蒲鉾を少しお土産に持参したところ、寝たきりになっている奥さんが大変喜んで少しだが食べてくれたと喜んで頂いた。その夜もその畳屋さんと真っ暗な四阿で2時間ばかり世間話をした。滅多に他所に行く機会が無いので、この遍路小屋に泊まる日本各地からの遍路の話を聞くのが楽しみだと言っておられた。

【10月11日、曇り】 神宅（徳島駅経由バス）勝浦町生名～別格第3番「慈眼寺」往復

今回の88ヶ所スタートの第20番札所「鶴林寺」の登山口は、小松島に注ぐ勝浦川畔の遍路道を小松島近郊の第18番札所「恩山寺」から遡って歩約1日行程の徳島県勝浦町生名地区にある。生名地区は剣山地の勝浦川河岸段丘にあるのびやかな田園地帯で、河畔の両側には剣山地の山々が迫っていて、やはり山国ではあった。

この生名から勝浦川を半日程遡った隣町・上勝町の山中に鶴林寺の奥之院でもある別格第3番「慈眼寺」がある。この寺は「穴禅定」（身体が通るか通らないほど狭い鍾乳洞の中を這う修業）が有名で、寺が行う有料の穴禅定体験ガイドツアーも用意されていた。

寺のHPによれば、『弘法大師十九才の御年、世の中の人々の生活苦、病苦及び一切苦厄を除くために修業中、夢のお告げにより不思議な鍾乳洞を発見。大師、洞窟の邪気祓いのため護摩をたいて洞窟を清め、悪魔悪竜を洞窟の壁に封じ込め末代衆生のため結縁灌頂の秘宝を修せられた行場として崇信者が多い。僅か百メートル程の洞窟だが導師の言われる通りにせねば進退窮する。心を素直にさせられる妙刹である。穴禅定を無事御参りできますと、一、無病息災で長患いをしない。一、金運、開運が成就します。一、狭いところを通り抜けるので、入試、安産、交通安全の成就ができます。その他、お大師様におすがりして種々の御利益がいただけます』とある。寺の納経所では、「穴禅定は如何ですか」という勧誘が盛んで、1人なら3000円、二人ペアなら1人2000円、3人以上なら1人1000円という値段表が掲げてあった。

境内には「穴禅定 行場の路幅体験場」という石柱が建てられていて、この2本の石柱の狭い空間が通り抜けられない人は、鍾乳洞の中で進退窮することになるので、穴には入れないということになっていた。試してみるとビール腹が通らなかったのも、この苦行は止めにした。



(慈眼寺大師堂)



(穴禅定行場。右上の茶色階段が入口)

この晩は、道の駅「ひなの里かつうら」にある遍路小屋に泊まった。多少汚いがフトンも置いてあったがこの時期には有り難かった。近くのコンビニでロング缶ビール4本と弁当を買ってきて、道の駅の営業時間が終わって人がいなくなってから蚊に喰われながら般若湯を頂戴した。独りで泊まる遍路小屋は、イッパイやっても午後6時頃には何もすることが無くなるので、極めて長い夜となる。これも苦行の一種であろうか。そのようなこともあるかと、最近復刻出版されたばかりの江戸時代の遍路ガイドブック、宥辨真念著「四國徧禮道指南」^{へんるみちしるべ}やその他の遍路本3冊ほどを持参したのだが、夜に遍路小屋でヘッドランプを灯して本を読むなどということはサッパリお呼びではなく、重いばかりの無用の長物と化してしまった。

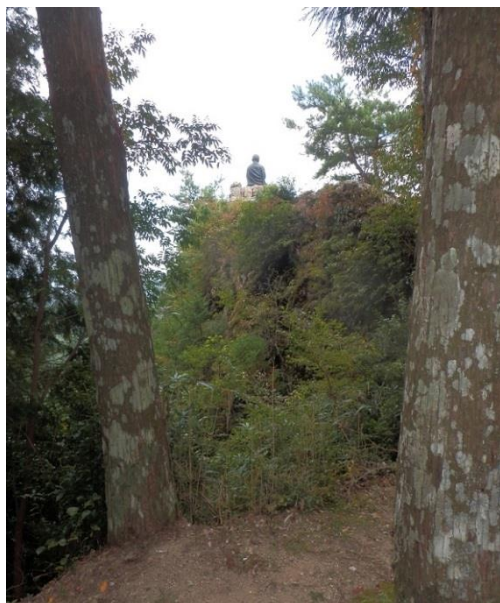
慈眼寺の御本尊は十一面観世音菩薩、真言は「オンマカ キャロニカ ソワカ」。意味は、「観世音菩薩様の御慈悲が行き届きますように拝し奉ります」。



【10月12日、快晴】 生名～20番「鶴林寺」～21番「太龍寺」～太龍寺「南舎心ヶ岳」～阿瀬比

四国88霊場で空海が捨身の修業を行ったとされる捨身ヶ嶽は2箇所あり、一つは阿波の21番霊場太龍寺の舎心ヶ嶽、もう一つは讃岐の73番「出釈迦寺」の我拝師山捨身ヶ嶽である。第一回目の遍路行脚では、後者には詣でたが前者には行きそびれていたもので、今回は太龍寺から下るコースを南舎心ヶ嶽経由の「いわや道」・「平等寺道」（何れも最近整備された新遍路道）から阿瀬比集落に下った。

太龍寺の南舎心ヶ嶽は、太龍寺から20分程の急峻な岩場の頂上で、眼下には深く急峻な溪谷の向こうに太平洋が望めるという修行の場としては誠に絶好の場所である。岩場の上には座して修行している空海像が立っている。そこに行くには鎖場を登る。劔岳のカニのタテバイよりもキツイ岩場であった。登山のベテランならともかく、一般の遍路は墜落や滑落で命を落とすのではあるまいか？マ、捨身には誠に相応しい岩場ではあった。（下左：舎心ヶ嶽の空海像、右：同 鎖場）



空海は 19 歳の時に、この岩場に坐して遥か太平洋の怒涛を聞きながら、虚空蔵求聞持法を習得したとその自伝「三教指帰」に書いている。曰く「余に虚空蔵持聞の法を呈す。ここに大聖の誠言を信じて飛翯を鑽燧に望む。阿国大滝岳に登り攀ち、土州室戸崎に勤念す。谷響を惜しまず、明星来影す」。

虚空蔵求聞持法というのは、真言を百万遍となえる最も難行とされる修法で、これを会得すれば記憶力が飛躍的に増進するという。若き空海は、どんな長いお経でも覚えられるようにこの修法を修業したのだそう。真言を 1 日に 1 万遍、それを 100 日間連続して百万遍となる訳であるが、実際にこれをやってみた哲学者の上山春平氏によれば、短い真言を繰り返し唱え続けるということは、気が狂うほど退屈な苦行であるらしい。それにしても、百万遍という数をどのようにして計数したのだろうか。大小の桁石でも順番に並べていったのか？

今夜は阿瀬比の「阿瀬比遍路小屋」またはその近くの道の駅「わじき」の軒下に仮寝の宿を借りる積りであったが、どちらもとても泊まれるような場所が無く、また昨年泊まった平等寺門前の民宿「山茶花」も満員だったので、少し遠いが阿南市桑野駅近くの旅館「えもと」に電話して迎えに来て貰った。翌朝も次の札所平等寺まで送り届けてくれたので大助かりであった。(7000 円、応対、料理とも良)。

【10月13日、快晴】 22 番平等寺～23 番薬王（徳島県日和佐）

月夜御水庵の入り口の道路を掃除していたオバサンが自宅の庭に成っていた柿を摘いで下さった。

この先、少し遠回りにはなったが、前回寄れなかった平等寺奥之院の「弥谷観音」に巡礼。無住。寺伝によれば、この地を訪れた大師が巖に如意輪観音をきざみ岩窟で護摩供を修すると、満願の日に次のような七不思議を遺された。不二地蔵、竺地蔵、四寸通し、硯石、ゆるぎ石、日天月天の跡、胎内くぐり。ゆるぎ石は観音堂の横に置かれていた。

本堂横の箱には如意輪観音のお札が置いてあったので、有り難く頂戴してきた。暫く本棚にでも貼っておこう（右写真）。

この日は、偶々オーストラリアからの単独ノルディックウォーカーの若者と一緒になって、途中まで話しながら歩いた。由岐の町に出て、港の「みなと食堂」でビールで喉を潤してラーメン昼食。

今夜の仮寝は、できれば日和佐の道の駅に泊まりたかったのであるが、ここは JR 日和佐駅の構内でもあるので人通りが多く、遠慮して駅前のビジネスホテルに泊まった。野宿のベテランと思われる人が道の駅に待機して居て、ここどこそこの場所が野宿テントにはサイコーだとか何だとか教えてくれた。野宿の順番待ちのルールができていらしい。

無料の足湯もあったりして、今回は是非この「道の駅日和佐」に仮寝の宿を結びたい。駅前ビジネスホテル「B.H. ケアーズ」泊（4,820 円）。般若湯は「つくし屋」2,800 円。日和佐の街は呑み屋は非常に少ない。

【10月14日、快晴】 日和佐～海部町那佐

本日は、少々長い巡路になるので、JR 日和佐駅から JR 牟岐駅までは飛天の術を使った。本日は札所無し。昼食は、去年泊まった鯖瀬の民宿料理屋「海山荘」でビール 3 本飲んだ。

本日の泊まりは、海部集落から那佐湾へ越える峠にある那佐の「NASA 遍路小屋」。チョット寂しい峠路の路傍であったが、近くに民家が 1 軒あって、その門燈が灯されているのが心強かった。民家などが全く無い

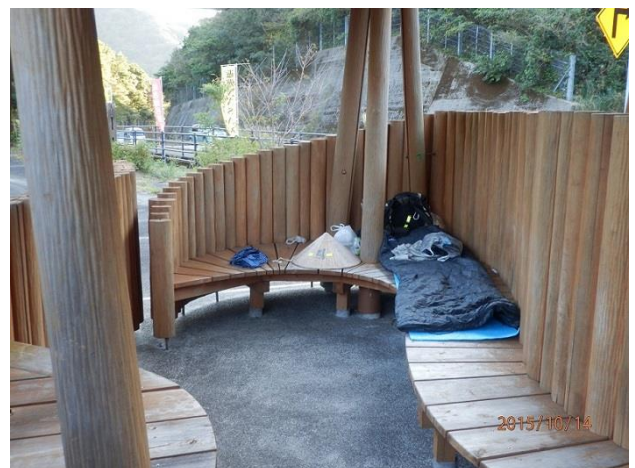


山中の遍路小屋に泊まるのは、かなり寂しいものである。大昔の遍路はこのような山深い山中に仮寝をしたことを思えば、野宿と言えども今の巡礼道中は極楽のようなものだ。

般若湯は、遍路小屋から 20 分程歩いた海部駅前の「鮎処道楽」。大将がかって東京新橋で寿司職人をやっていたなどの話から会話が弾んで、チョット一杯の積りが 4,500 円。隣のカラオケバーにも寄って、菅原洋一とフランク永井、それに美空へばりの「乱れ髪」、挙句の果てにダニーボーイまで唸ってタッタの 1000 円。ビール 2 本とも。全く安いネ。これはカラオケバーのオニイさん店主のお接待だった。

今夜は、御利益多き“葷酒山門”でありました。仏様と弘法大師に心から感謝と敬意を拝し奉ります。「オン イロキャベイ イロシャノ オナカモダラバニ ヘンドバジンバラ ヘレベリタヤ ウン」、「オン ボウ ズ シッタ ボダハ ヤ ミ」、「オン サンマヤ サトバン」、「不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不騎語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見」、「観自在菩薩 行深般若波羅密多時……掲諦掲諦 波羅掲諦 波羅僧掲諦 菩提薩婆訶 般若心経」、「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛」、etc., etc. お経読みも疲れるワイ。

NASA 遍路小屋の様子は下のようなものだった。「四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクトを支援する会」（会長は元朝日新聞記者で長年天声人語欄の執筆者でもあった辰濃和男氏で、岩波新書「四国遍路」の著書もある）によれば、この小屋のデザインは付近に生息している大うなぎをイメージしているそうだが、天井のアルミドームはちょっと遍路のイメージからは外れていた。“NASA”に引かれて、宇宙ステーションのイメージに惑わされたのではあるまいか。遍路小屋の名前を「那佐」遍路小屋とせずに、態々“NASA”としたのは、この小屋が「遊遊 NASA ふれあいの宿」というリゾートホテルの山中の駐車場入り口に建っているからかもしれない。



(海部、NASA 遍路小屋)

**【10月15日、快晴】 海部～24番室戸「最御崎寺」～25番「津照寺」
～26番「金剛頂寺」**

本日もちょっと長い行程なので、JR 牟岐線の終点「海部駅」から徳島・高知県境を越えて、阿佐海岸鉄道の終点である高知県東洋町の甲浦駅まで飛天した（と言っても、飛天距離は 10 ㌾、乗車時間にして僅か 10 分）。

海部から、次の札所第 24 番「最御崎寺」がある室戸までは歩きでは未だ 2 日間掛かり、予定では高知県室戸市・佐喜浜漁港にある大師堂に寝させて頂くことにしていたが、途中の番外札所の所明徳寺（東洋大師堂）で偶々遇った野宿遍路氏と無駄話に興じたために、これから先の佐喜浜漁港までの長い道程をトボトボ歩くのがカッタルくなり、どうせまたまた飛天するのならチマチマとやらずに、一気にド～ンと次の札所の室戸岬の「最御崎寺」まで路線バスで稼ごうではない

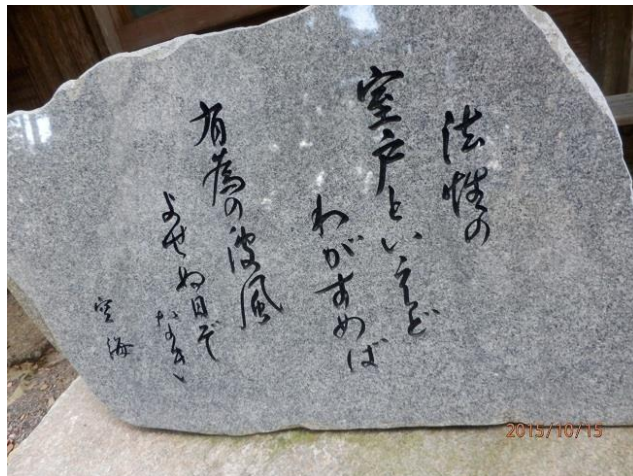


かと横着なことになってしまった。マ、“歩き野宿”に拘泥せず、たまには楽ちん遍路も良いではないか。流石に文明の利器は速く、1時間足らずで室戸岬に着いた。

そのような訳でガッポリ時間の余裕ができたので、本日は25番「津照寺」、26番「金剛頂寺」まで足を延ばし、その夜は金剛頂寺の宿坊に泊まった。宿坊と言うものに初めて泊まったが、抹香臭さなどは全くない民宿風で、料理も部屋もなかなかによろしかった。混んでいる時には相部屋になるのかもしれないが、今日は客も10人くらいしかいないので個室であった。部屋の窓から鬱蒼とした境内の樹林を透かして室戸市街の灯りがよく見えた。護摩堂で朝の勤行もあった。ご本尊は薬師如来、ご真言は「オン コロコロ センダリ マトワギ ソワカ」。1泊2食6500円。遍路に人気が高いそうだ。



(金剛頂寺から室戸市街、右端の岬が室戸岬)



(金剛頂寺にあった空海の歌碑)

【10月16日、快晴】 金剛頂寺～高知県田野町（奈半利の先）

本日は札所は無し。宿は、奈半利の先、土佐くろしお鉄道「田野駅」近くの善根宿「旅の宿・美園」。山本美園さんという寡婦が提供されている民家の善根宿。町会議員でもあり町起こしの先頭に立ってご活躍の由。家で近所の子供の勉強を見たり、他県からの農業研修生も2名下宿させている。世話好き、話好きのようで、遍路のことや地元の様子等も聞けて楽しかった。

英語が話せるので、外人遍路の定宿にもなっているらしい。この日もフランス人遍路3人が泊まっていた。食事のメニューもなかなかのものであった。洗濯もして下さった。

混んでいればザコ寝となる。2食付・オニギリ弁当付で2500円ナリ。泊まる前は、一般の民家の善根宿であるからきっと肩が凝るのではなかろうかと余計な心配をしたが、ナニナニ、あっけらかんとしたもので、その中にもお接待の厚い心意気が感じられてサイコーであった。



(中央左の白い家が山本美園さん宅)

【10月17日、快晴】 田野町～27番「神峰寺」～高知県香南市香我美

今回の神峰寺への登りは大変キツく感じた。1年前にはそれほど感じなかったが、やはりこの1年間で相当体力が落ちているのかもしれない。ゾ～ッ。

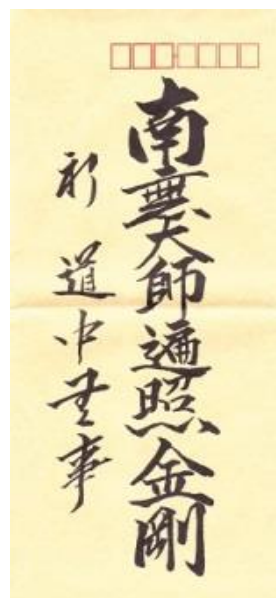
香我美では香我美遍路小屋に泊まった。この小屋は他の小屋が通例はメイン道路に面しているのですが、この小屋は旧遍路道際にあつて静かなものだった。この地は吉村昭の小説「漂流」のモデル野村長平が生まれた在所で、土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線の香我美駅前広場にはその銅像と墓が建てられていた。前回も書いたが、野村長平（江戸時代）はこの地の水主で、すぐ近くの赤岡から奈半利に米を運んだ帰りに冬の嵐に遭遇、帆柱と舵を失って漂船となり、黒潮に乗って室戸岬から遥々無人島の鳥島まで流された。そこでの13年間をアホウ鳥で命を繋ぎ、苦労した挙句に漂着した木材や廃船の材木で船を作って八丈島に帰還したという稀有な水主であった。

さて、その香我美遍路小屋には、汚いけれども布団や座布団が備えられていて助かった。また、水道も備えられ、蚊取り線香や遍路本、缶コーヒーもカートンで置かれていたので、早速1本頂戴した。翌朝もモーニングコーヒーと洒落こむことができて有り難かった。後から来るお遍路達のために何か遍路で役立つ物を置いて行きたかったが、生憎そのような物は持ち合わせていなかった。

近くからお爺さんが現れたので、宿泊のお願い少々挨拶をしたら、「よう来なさった」と歓迎して下さって、話が遍路一般から世の中の話まで及んだ。このお爺さんは77歳だそうだが、心身、特に心の方が大変お元気とお見受けした。この小屋のお世話をされているようでもあった。曰く「あれだけの福島原発の事故が起きたのに、安倍首相は懲りずに原発を推進している。一体何を考えているのか。産業界からの札束に牛耳られた馬鹿・無能としか言いようがない。彼に限らず、今の政治家には見識というものがない。加えて国民の公僕という意識が全く欠如している。馬鹿を通り越して無能ばかりだ。このような政権を変えるには、我々選挙民が立ち上がるしかない。次の総選挙では安部首相率いる自民政権に天罰が当たって必ず敗退する。云々・・・」。これは私も全く同感であったから、暗くなった遍路小屋で蚊に喰われながら話が弾んだ。遍路に出てまで政治の話をするのも生臭いものではあるが・・・。

遍路に纏わる話では、「普通、遍路はお寺でお経を読む時に、暗記しているお経を棒読みで読む遍路が多いが、これではいけない。お経と言うものは、経典を目で見てその文字の意味を考えながら読むのが本筋であるから、お経などが書いてある勤行次第や経典を見ながら一字一句丁寧に読経するのが本来である、云々・・・」。お経にも詳しく、いくつかのお経の意味や読み方、梵字の意味なども開陳された。私はお経はサッパリでクチパクの類であるから、只々恐れ入って拝聴しているだけであったが・・・。

話の途中で一回家に帰られて、今書いたばかりであるがと墨黒々と達筆で書かれたお接待を差し出された（右写真）。中には千円札が1枚入っていた。現金のお接待は、前回讃岐を行脚していた折に途中の店で道を聞いた折、たまたま買い物に来ていたお婆さんがお釣りの五百円玉を下さったことがあったが、札を頂いたのは今回が初めてであった。お婆さんの五百円玉は、同じく讃岐の札所の門前で近所のお爺さんから頂いた親指大の自家製陶器の地藏菩薩の座布団になっているが、今回頂いた千円札はこのお地藏さんの身体を包む蓑となつて、我が自宅の机の上に鎮座ましまして。おん かかかび さんまえ そわか。



さて、遍路小屋からこのお爺さんが帰られてから、チョット一杯に出掛けた。呑み屋は幸運なことにたった一軒だけが見つかった。なかなか風格ある髭の大将がやっておられる極く極く小さな焼鳥屋だった。“呑み小屋 髭爺”の看板が泣かせる。



【10月18日、快晴】 香我美～28番「大日寺」～29番「国分寺」～30番「善楽寺」～高知市内

室戸の海沿いの道中から、いよいよ高知市近郊の田園地帯に入った。

大日寺では、自動サーバーのコーヒーお接待があり、早速モーニングコーヒーを頂いた。また、フランス人女性お遍路からバナナの接待も頂いた。フランス語は、昔下宿していた中央線高円寺駅前にあったバーの名前^{パピヨン デュ ニュイ} papillon du nuit (夜の蝶) 程度しか覚えていないが、この御婦人お遍路に^{メルシー ボクレー} “Merci beaucoup et bon voyage!!” とお礼を言ったら、こんな鄙でフランス語を喋れる日本人がいるのかいな？という顔をして喜んでくれた。何を隠そう、自慢ではないが、もう 50 年も前のことになるが、会社の勤務が退けてから御茶ノ水の有名な外語学院であるアテネ・フランセのフランス語夜学に 1 年ばかり通っていたので、フランス語には昔は些かの自信があったノダ。しかし、この御婦人お遍路に続けてフランス語で質問などをされると、俄かフレンチスピーカーの小生は化けの皮が剥げるから、私メはコソコソと立ち去って逃げたのでありました。

それにしても、今回は前回と比べて外国人巡礼が格段に増えているようだった。特に欧米人の独り歩き巡礼の人が多。このところの円安のせいかもしれない。外国人向けの英語版の遍路ガイドブックも発売されており、地図の地名もローマ字で記されている。このガイドブックには外国人にも知られた宿泊所として安価な善根宿が多数掲載されているようだ。

大日寺では奥之院の爪彫薬師にも詣でた。弘法大師が楠の立木に爪で彫られたという薬師如来に由来する。また、次の札所国分寺では、「酒断地藏尊」というのもあった。お参りしてみたが、当然ながら験は無かった。マ、験があつたら、逆に困るノダ。

今夜の泊まりは、国分寺から善楽寺へ向かう途中の山中の峠道の路傍にある蒲原遍路小屋を期待していたが、寝られるような小屋ではなかったので、高知市内迄足を延ばして昨年泊まった旅館「とさ別館」に泊まった。途中、「土佐一宮」駅前の呑み屋が開店準備をし



ていたので、開店前ではあったがちょっと頼んでビールだけ飲ませて貰った。大将は昔カツオ漁船に乗っていて遠くアフリカやアイスランドまで出掛けたと言っていた。高知では、はりまや橋の近くの呑み屋「夢の里」で一献、2600 円。

【10月19日、快晴】 31番「竹林寺」～32番「善師峰寺」～33番「雪溪寺」～34番「種間寺」

種間寺の通夜堂泊。初めて通夜堂なるものに泊まった。昨今は通夜堂に泊めて頂ける札所は少ないが、附近に宿が無いような札所では通夜堂を遍路に開放してくれている札所もあるらしい。“らしい”と書いたのは、通夜堂の有無などの情報は遍路ガイドブックや遍路HPなどには掲載されていないので、一般には分からないからである。

通夜堂にも種々あって、本当の“通夜堂”から、簡易宿泊所のような部屋もある。この種間寺の通夜堂は、寺のガレージ棟の1室を宿泊所に改造したような部屋で、6畳間の畳敷き、温水シャワー、座卓、寝具、座布団、扇風機、蚊取線香完備という民宿並みの快適さであった。布団も非常に綺麗で清潔な羽根布団や毛布が2～3組整えられていた。全くの極楽であった。おまけに納経所の人も親切であった。

今晚の宿泊は、小生独りだけであったので、朝出掛ける前に高知市街のコンビニで予め買って担いできた般若湯（完ビールは保冷の術がないので梅酒にした）とコンビニ弁当で弘法大師にも般若湯を差し上げつつ、葷酒山門に入るを許した。最初の内は、例えガレージ棟ではあってもいやしくも“通夜堂”なる聖なる場所で葷酒を頂くなどということに多少の気が引けたが、頂いているうちに葷酒は般若湯となって堂々と頂いた。住職や寺男が見回りに来られたら酒は机の下に隠そうと秘かに目論んでいたが、そのような見回りなどは無く、大変に結構な通夜堂であった。



（種間寺の通夜堂。左の白い建物の左端の窓がある部屋が通夜堂。同、内部）

【10月20日、快晴】 種間寺～35番「清瀧寺」～高知駅～帰宅

清瀧寺は、江戸時代には土佐藩主の帰依が厚く、厄除け祈願のために寺領数百石の寄進を受けて七堂伽藍を備え、末寺10数ヶ寺を持つ土佐路の大寺であったそうだが、今は寂れているようだ。この寺は、土佐市街地近郊の山の中腹にあり、車道が狭いので大型観光遍路バスが通れないために団体遍路の巡礼が少なく、従って納経収入も少ないのかもしれない。本堂の横に高さ15メートルの厄除け阿弥陀如来立像があり、その台座が88段の戒壇巡りになっていたのに入ってみた。真っ暗闇の中を手探り足探りで恐る恐る進んだみたが、どこかで閻魔大王の監視カメラに見られているようで大変に怖かった。

マ、前世の因縁も良く、今世でも善根を積み、修行もできている人には阿弥陀如来が微笑んでお迎え遊ばされるのであろうが、私如き悪人は血の池に墜ちるのが関の山であろうから、そのような悪人には

このような恐怖を感じさせる「踏絵」になっているのであろう。下の立山曼荼羅図にも描かれている地獄絵のとうりである。

この寺は土佐市街を見下ろす山の中腹にあり、鐘楼には、「鐘をみだりに撞かないで下さい。火事の通報と間違えて、下の消防署から消防車が上がってきますので・・・」と書かれているのが愛嬌があった。ナルホド。

阿弥陀如来立像
高さ 15 メートル。
基部に真っ暗な
戒壇巡りあり。



（立山曼荼羅図。中段左側が地獄の血の池と業火）

（その 3 丁）

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン  で戻って下さい